



心の原風景

# 北海製罐第3倉庫展

特別出品：藤森茂男

館藏品：木嶋良治・鈴木傳・富澤謙・大和屋巖

小樽運河のシンボル、北海製罐小樽工場第3倉庫が解体の危機に瀕し、保存と活用を検討する動きが進められています。北海製罐は1921(大正10)年の創業で、小樽運河の造成地にあった東洋製罐の工場を譲り受け、工場・倉庫・事務所を次々に建設し、現在みられる重要な歴史的景観を形成していきました。運河とともにある水辺沿いの建築群は、小樽が観光都市となっていった背景にある、魅力的な景観を有しているといえます。プロレタリア作家 小林多喜二の小説『工場細胞』(1930年)の舞台となったように、その威容は、北海道の原風景であり、人々の血と汗の滲んだ労働の匂い、さらには生きた証を感じさせます。

運河の水辺と調和する北海製罐の光景は、運河を心のふるさととして愛した画家たちの手によって、たびたび描かれてきました。運河保存に向けて最初に行動を起こし、最も精力的に活動した藤森茂男(1936-87年)が描いた150点もの風景画のなかに、北海製罐



藤森茂男 運河うら北海製缶倉庫と工場 1985年

第3倉庫の姿が随所に現れています。「北海製缶倉庫の夏」1985年のように、第3倉庫そのものを主役として描いた作品も多く、藤森にとって運河と北海製罐は切り離せない一体感をもった存在であることがわかります。

藤森は、おたる潮まつりの企画に携わるなど、常にその仕事は小樽の街とともにあった人で、商業デザイナーである彼があえて「絵画」を描いたのは、運河と周辺の景観を守るための最終手段であったからにほかなりません。50歳になる手前で逝ってしまった短い生涯の最後に、命を削るようして描いた絵画により、人々は認識を新たに、景観を守ることの大切さを教えられたのです。

市立小樽美術館にも、運河と北海製罐を描いた作品が収められています。収蔵品には、青年期に結核を患い、苦しい心の内側を投影するように至近距離で倉庫と運河の水面を描いた木嶋良治、歴史と記憶を刻んだ古びた建物のなかに一筋の美しさを見いだした鈴木傳、透明水彩を重ねて幻想的に煌めく運河と倉庫を描いた大和屋巖、スケールの大きな構図で北運河を集中的に描いてきた富澤謙などの作品があります。

本展では、藤森茂男の作品を中心に、当館コレクションを加え、絵画に現れたさまざまな北海製罐小樽工場第3倉庫の姿を展覧いたします。港で繁栄した往時の小樽を象徴する、心の原風景をぜひご覧ください。

\*都合により、展示作品が一部変更となる場合があります。



木嶋良治 運河(影) 2005年



富澤謙 北浜運河 1999年